能楽師大西家盛衰記―『國諷』を中心に―

関屋俊彦

はじめに

　コロナ禍の影響は相変わらずで資料調査のための出張を制限せざるを得なかった。しかし、その中で法政大学能楽研究所鴻山文庫所蔵の『國諷』の写真を研究所の御厚意で業者委託の撮影により全冊入手出来たことは大きかった。能楽の総合誌の嚆矢は明治三十五年七月に池内信嘉が創刊し坂元雪鳥が編集発行人となった『能楽』（能楽館）で現在では復刻版もあり、研究者はよく利用している。私は能楽師大西家文書を整理しているうちに大西閑雪（天保十一年～大正五年）・大西（手塚）亮太郎（慶応二年～昭和六年）の活躍ぶりは大阪で唯一発行された『國諷』（明治三十九年七月創刊）に書かれているのではないかと踏んで、何度か能研に赴き丁寧に読み始めていたのだが、紙質は正直言って頁をめくるたびにぼろぼろと細かい紙片が落ちてくる有様であった。とても全巻読み進めるのは難しいと途方に暮れていたのだが、思い切って写真を依頼したところ特別に許可を得たのである。読み進めてみて、果たせるかな近畿周辺の能楽師の活動が拾えた。

　以下、確認し得た鴻山文庫の『國諷』は次の通りである。創刊号は別にして「『國諷』明治三十九年九月号」のように巻号日は省く。尚、表紙・裏表紙の絵は毎回、玉手菊洲である。

＊第一号＝明治三十九年七月二十七日＊第二号＝明治三十九年九月三十日＊第三号＝明治三十九年十月三十一日＊第四号＝明治三十九年十一月三十日＊第五号＝明治三十九年十二月十八日＊第六号（第二年第一巻）＝明治四十年一月七日＊第七号（第二年第二巻）＝明治四十年二月廿八日＊第八号＝欠号＊第九号（第二年第四巻）＝明治四十年五月十二日（この号より編輯兼発行　泉泰知・号「秋花」）＊第十号（第二年第四巻）＝明治四十年六月二十日＊第十一号＝欠号＊第十二号（第二年第六巻）＝明治四十年七月廿五日（巻・日付記載ミス）＊第十三号（第二年第七巻）＝明治四十年九月廿八日＊第十四号（第二年第八巻）＝明治四十年十

一月十五日＊第十五号＝欠号＊第十六号（第三年第壱号）＝明治四十一年一月廿九日＊第十七号（第三年第二巻）＝明治四十一年二月廿八日＊第十八号（第三年第三巻）＝明治四十一年三月廿八日＊第十九号（第三年第四巻）＝明治四十一年五月十五日＊第二十号（第三年第五巻）＝明治四十一年六月十五日＊第二十一号（第三年第六巻）＝明治四十一年七月十五日＊第二十二号（二十一と誤植・第三年第七巻）＝明治四十一年八月十五日＊第二十三号（第三年第八巻）＝明治四十一年八月十五日＊第二十四号（第三年第九巻）＝明治四十一年十月十五日＊第二十五号（第三年第十巻）＝明治四十一年十一月二十日＊第二十六号（但、記載なし・第三巻別巻）＝明治四十一年十二月九日＊第二十七号（第四年第一巻）＝明治四十二年一月一日＊第二十八号（第四年第二巻）＝明治四十二年二月廿八日＊第二十九号（第四年第三巻）＝明治四十二年四月十五日＊第三十号（第四年第四巻）＝明治四十二年五月十八日＊第三十一号（第四年第五巻）＝明治四十二年六月十七日＊第三十二号（第四年第六巻）＝明治四十二年七月三十日＊第三十三号（第四年第七巻）＝明治四十二年八月三十日＊第三十四号（三十二号と記載ミス・第四年第七巻）＝明治四十二年十月十八日＊第三十五号（第四年第九巻）＝明治四十二年十一月二十八日＊第三十六号（第四年第十巻）＝明治四十二年十一月二十八日＊（以下、号なし）第五年第一巻＝明治四十三年一月一日＊第五年第二巻＝明治四十三年二月廿八日＊第五年第三巻＝明治四十三年四月十五日（奥書「第二巻」と誤植）＊第五年第四巻＝明治四十三年五月十八日＊第五年第五巻第九月号＝明治四十三年九月二十日）＊第五年第六巻第拾月号＝明治四十三年十月二十日＊第五年第七巻第十一月号＝明治四十三年十一月二十七日＊第六年第七巻第十一月号＝明治四十四年一月三十日再版（元は明治四十三年十一月一日。明治天皇崩御のためか）＊第六年第四月号＝明治四十四年四月二十日＊第六年第六月号（第五週年紀念号巻之一）＝明治四十四年六月十八日＊第六年第八月号＝明治四十四年八月十八日＊第五週年紀念号巻之二（第六年第十月号）＝明治四十四年十月十八日＊第五週年紀念号巻之三・第六年十一月号＝明治四十四年十一月廿九日＊第六年十二月号＝明治四十四年十二月廿八日＊第七年第一月号＝明治四十五年一月十二日＊第七年第二月号＝明治四十五年二月十五日＊第七年第四月号＝明治四十五年四月五日＊第八年第一月号＝大正二年一月一日＊第八年第二月号＝大正二年二月一日＊第八年第三月号＝大正二年三月十日＊第八年第四月号＝大正二年四月一日＊第八年第五月号＝大正二年五月五日＊第八年第七月号＝大正二年七月一日＊第八年第八月号＝大正二年八月十日＊第八年第九月号＝大正二年九月十八日＊第八年第十月号＝大正二年十月十日＊第十年第一月号＝大正四年一月十日＊第十一年第一月号＝大正五年一月二十日＊第十一年第一月号＝大正五年三月八日＊第十一年第四月号＝大正五年四月十日＊第十一年第六月号＝大正五年六月十日

当初、大雑把に能楽師大西家の栄枯盛衰を記述するつもりであったが、『國諷』を再検討することによって、その伏線を辿ることが可能であることがわかり、先に提出したテーマに副題を急遽追加したことをお断りしたい。又、以下、煩雑さを避けて、いちいち『國諷』と記すのは避けて和年月号のみにしてある。

一　『國諷』記述京観世屋敷の謡初について

令和四年十二月二十九日に六麓会で、この章に絞ってオンライン報告した。世阿弥が将軍義満から拝領した檜とか糺河原勧進能の立て札が畳半畳あったという目撃談は多くの人にとって恐らく初耳であっただろうし、それに対して異論はなかった。質疑を含めて会員諸氏に感謝申し上げたい。

京観世屋敷にかかわっての先行研究の代表的なものに天野文雄氏の「世阿弥は京都のどこに住んでいたのか―大宮通五辻の観世屋敷をめぐって」(『観世』二〇一一年五月号)がある。観世宗家所蔵の屋敷図は未見とされていたが、すぐ反応があったと見えて、翌年に「京都観世屋敷関係資料」として松岡心平氏監修の観世文庫の文書56に写真入りで(『観世』二〇一二年一月号)紹介されている。京都観世屋敷は享保十五年(一七三〇)と天明八年(一七八八)の大火で焼失したが安永九年(一七八〇)に再建され、その折の屋敷図である。なお、明治初年公有地となり跡地には小学校が建設されている。現在では『観世文庫所蔵能楽資料解題』に「明治初年京都観世屋敷地一件」として解説がある。これでかなり史料を拾えると期待していたが、あくまで書籍の類である。面・装束ましてや刀剣の類は目録には入っていない。研究の広がりは別の角度から踏み込めるのではなかろうか。

『國諷』(明治四十三年一月号)の記述は短文だが次のような証言である。

なお、任意に句読点を施し、旧漢字は新字体に直し、ルビは省略した。補い字もある。［注］以下は筆者の考察である。

［談叢］林　喜右衛門▲観世屋敷の謡初

マア、今思ひ当りますのは古来仕来りの京都の謡初会ですね。今出川の大宮上つたところの角屋敷で千八百坪も敷地を構へ立派な住居を設けてありましたのが観世屋敷です。御承知の通り、観世大夫は江戸の方に詰めて居られましたから、時たまにしかお帰りがない。即ち御留守屋敷で、凡て御留守中の事は京都の五軒屋(片山九郎右衛門、林喜右衛門、井上次郎右衛門、岩井七郎吉衛門、薗久右衛門の五右衛門なり)でお預かりして居りましたが、二度も火災にあひまして、遂に享保年中に焼けたなり、あとはホンの御滞在に差支へないだけの仮住居の様なものにして仕舞ひまして、夫から江戸の弓町に観世屋敷が出来たのでございます。明治維新の前までは毎年々十一日といふのが謡初の式を挙ぐることに定められて居りましたもので、当日は未明から一同麻上下で出仕致し、正面の床には結崎世阿弥師(観世流二代の大夫なり)

が将軍義満公から拝領しました青江下坂の作にか丶る立派な槍がございましてね。夫だの勧進能の嚆矢たる糺（河）原の勧進能の立札、晴天十五日間、能興行被致候間、望の者は拝見致す可き者也。奉行。と筆太に記されたる畳半畳敷大の札を飾り、勿論、御鏡餅等を供へまして、夫々式に移ります。当日は『弓矢立合』及び『ところは高砂の』の小謡があり、その他、仕舞が数番ございます。而して『弓矢立合』等は前に申した五軒屋に限つたもので、小謡・仕舞等の地は当日出勤の職分一統が勤めます。大阪や江州あたりからも当番がございまして、年々一人宛上つて参りましたが、大阪からは私が覚えて居る時代では大西寸松翁が多く上つて参りました。新右衛門（今の閑雪翁）さんもちよい〳〵来たことがございました。式が悉皆済みますと、謡本屋の山本長兵衛、扇屋の十松屋が参つて居りまして取持ちをいたし、御酒が出ました。そこで一同も気嫌よく小謡などを諷ひまして、今で申せば散会をいたしたものですが、（以下、省略）

[注]

＊林喜右衛門＝十世玄忠（嘉永二年～明治四十四年五月）。観世清孝から免許皆伝。

＊京五軒屋＝『能楽大事典』（筑摩書房）「京観世」では五軒家として「片山家のもとに」「浅野太左衛門」が入っている。語呂のいい「五右衛門」を使ったものか。

＊世阿弥が将軍義満から拝領した青江下坂作の槍＝これは恐らく林喜右衛門氏の勘違いであろう。刀工青江下坂は歌舞伎「伊勢音頭恋寝刃」の妖刀で有名であるが、江戸前期の刀工である。それに替わる者として、筆者は文和・応永年紀の後鳥羽院番鍛冶として名を挙げた備中青江派の青江長次を候補に挙げておきたい。槍とはいえ、伝来が本当なら世阿弥が武家待遇であったことの証左になる。なお、この際、もしやと思って辻本直男補注『図説　刀剣名物集』（昭和四十五年二月・雄山閣）を繰ってみたところ東京国立博物館保管として御物・国宝になっている「観世（正宗）」を見出すことが出来た。元は観世宗節が所持していたとの伝来がある。作柄等の記載も詳細である、それをも含めて観世宗家にはほかにも刀剣類が伝わっているのではないだろうか。

＊糺河原勧進能立札＝畳半畳敷大という。表章氏『観世流史参究』（二〇〇八年・檜書店）等を見てもこれほど大きなものは書かれていない。舞台図としては「観世アーカイブ」に元禄十五年写掛軸等が掲載されているが、掛軸ではなく、はっきりと立札と記されている。これも観世宗家御所持か。

＊参会者＝大西寸松・新右衛門（閑雪）・山本長兵衛・十松屋の名が並ぶ。大西家では寸松（四世・虚雪）・閑雪（五世・寸松次男）の親子が参加している。今のところ二人が京観世屋敷について書き残しているものは未見である。

二　関雪と〈関寺小町〉・雪号

筆者は大西家に伝来されていた〈関寺小町〉を『武庫川国文』第八十八号（令和二年三月）に紹介し『國諷』も使ったことがある。そちらをも参照されたいが、泉秋花が創刊号で小書き「筆染の伝」「移り拍子」「送り留伝」を説明していることを付け加えたい。更に『國諷』大正五年一月号では同じく秋花が［十年の思ひで（七）］として明治四十二年四月三日の関雪三度目の〈関寺〉京都での時、「舞の半ばで（シテの）衣裳が解けて、始めは手で支えてゐたが、遂とう唐織で舞台をすつて歩く様になつたので止むを得ず後見座にくつろいでしまつた。囃子方は森田操、谷市之進、高井孝吉の諸氏であつたから、隙かさずクツロギ笛となり、會釋（アシラヒ）に変わったなどは流石にと思つたことであつた」との記録は興味深い。関雪のミスであるが、関雪を書く場合はほとんど誉め言葉しかないのだから珍しい。

ついでながら明治四十年六月号の［談叢］に観世清廉が雪号の謂れを語っている。すなわち、観世黒雪が家康の問に答え、山田守の船頭のことばに触発され勉励するようになったことに続き、大阪では嚢に大西鑑一郎六十歳の折、願に依てこれを授け関雪となったと述べる。

三　禁裏能の話

次に気になったのは禁裏能の関雪の体験談である。禁裏能の能組は伝えられているが、実際に参加した演者の生の声はそれほどない。長文なので「・」は中略している。

大西関雪・（某新聞社の方にお話した事もありますが・話漏れた事もありますからそれを補ひ）・其昔桜能（春）紅葉能（秋）と申し毎年二回定期の催し・徳川家になって四座の役者は出勤禁止・御即位式・御祝能のほかは廃止・廃止の理由は能役者と女官との醜聞・初出勤の際には一札を御能肝入りに提出・京都在住の弟子、岩井、林、園、片山、井上の五軒家が出来た・記述詳細・写真（國諷能楽会に於ける　大西関雪翁の素謡『鞍馬天狗』）・瓢遊亭主人が坊主頭のため髷被ぶりで出た。（明治四十年六月号）

四　『國諷』と秋花と関雪・亮太郎

『國諷』の創刊号は明治三十九年、当時大阪で唯一発行された能楽の総合雑誌である。編輯者　神茂美・発行者　青山秀松・印刷者　町田栄三・印刷所　辰巳会印刷部・発行所　國諷会本部としていた。「会員申込幷雑誌販売所」として、大阪市に國諷会本部を置き吉田積善館・松本書店が販売し、東京では檜書店・堀井呉三郎・わんや書店の名が連ねられている。賛助会員（正会員）に大西関雪・亮太郎が名を連ね、「祝詞」として宝生九郎や観世

清廉等能楽師の名が挙がり、各界からは泉鏡花・大和田建樹の名前が見られる。

閑雪は「難波江や波間にしげるよしあしを　かきわけ行かん海士小舟かも」の和歌も呈上し、「談叢」としてエッセイと「謡曲の心得」を提供して力を注いでいることがわかる。明治三十九年九月号には発刊に際して泉秋花は「大西閑雪翁の許へも出掛けて行つて其旨を語ると翁は又斯いふ事は極めて好の方でもあるし斯道に就ては関西といふよりも日本に其人ありと知られた人物でもあり此人に首を横に振られたら雑誌の材料は勿論その目的遂行のためにも一方ならず困難を感じなければならないと思ふ矢先是も二つ返事で大層自分等の奮発を賞揚され何処迄も一つ片肌脱いでやらうとの言葉」と記し、亮太郎の了解も得ているので秋花の喜びようが素直に記されている。

大阪を中心とした近隣各地の能楽の催しも勿論掲載している。以後も閑雪・亮太郎の舞台記録は頻繁であるが、拠点としていたのは大阪博物場である。創刊号には「大阪博物場の能楽舞台が出来上がつたのは明治卅一年十二月であつた、其時舞台開きの能楽は左の如き番組であつた、余り古きことではなきゆへ強記の人は覚えて居るであらうが本誌の開刊に芽出て書て見う」として詳細な能組を記載している。頁記入は66で毎月発行するとの意気込みは示していた。

順風満帆な発足であったが、実際には経済的にも行き詰まり、発行も飛び飛びになっている。早くも明治三十九年九月号では「國諷第貳号延刊に就て」と断る有様である。編集者も当初こそ複数の名前が挙がっていたが、明治四十二年五月号に「当地の吉田書店の主人のごときは常に『國諷会は泉（秋花）さん独りでコツ〳〵やつて居るからア、して長持もするのですし破壊れもしないのです』」と述べているし、実際、編輯兼発行者は泉秋花こと泉泰知一人になっている。大正五年四月号になると「社告」で「欧州戦乱の余波は紙類の破格暴騰印刷料の値上等に遭遇」とあり、現代の世界情勢をも連想させる。

この泉秋花であるが、大正四年一月発行の『國諷』に秋花自ら自分の生い立ちを述べている。すなわち「十年の思ひで」として「私（泉秋花）は東京で生れ、東京で育ち、たゞ新聞記者として大阪に居つた・東京には池内君が『能楽』を発行して未だ間のない時分であつたのと・我社は態と大阪の雑誌といふ事を一つの特徴として・大阪新報社記者から神戸新聞記者となる」と記している。なお、大正二年五月号で「毛嫌ひは大禁物」で関西風と東京風の違いを記しているのに見られるように『能楽』を意識してか関西風を出そうというのが本書の特色でもあろう。大正四年一月号からは［付録］結崎世阿弥遺訓観世元章増補〈桜狩伝〉を紹介しているが、内容は『風姿花伝』である。

秋花は大阪を中心にして全国展開を当初より目指していたのかも知れない。明治四十二年八月号には［何故『國諷』に広告すれ

ば効能がある?」に「読者の数は優に数万に達して居る」とするが、それこそ誇大広告である。実態は大正二年二月号に［國諷会報］として「地獄落しの報告」すなわち会費を支払わない者の名簿を公表するといった現代では考えられないことを行なっているのである。

五　大阪博物場能楽堂の実態

『上方芸能』にも書いたことがあるが、明治末、大阪の能楽堂でまず挙げられる大阪博物場の実情である。明治四十一年五月号に泉秋花が［大阪の能舞台］で次のように述べている。途中略した箇所もある。

「現今大阪に於ける能楽の繁昌を見るにつけ、その練習場たる能舞台を数ふれば情ない大西閑雪翁所有の一小舞台と博物場能楽堂の二ツしかないのである。閑雪翁の舞台は当時素謡の外能楽としては真の下稽古より外用ひられて居らず現に閑雪翁催しの能楽でさへ博物場の能楽堂を使用するのであるから、目今、能楽の大練習場としては実にその博物場能楽堂あるのみなのである。博物場は二月も前から他の借用人と競争して申込まなければ借りられない。設備は雨が降れば見所ワキ正面の広場等は所謂青天井でなくて黒雲であるから観客はヅブ濡とならねばならぬのである。好天気ならそれこそ青天井でカン〱と輝りつけられ、観客は暑くてとてもがまんが出来ない。（以下、借りるにも五十円という大金がかかることを述べた上で、安くして回数を多くする方がいいと提言）」。

六　生田秀・耕一のこと

創刊号に明治三十九年六月十日曽根崎松楓社で行われた「故生田秀氏の追福謡曲会・〈発声〉大西新三郎・〈追加〉大西閑雪」が注目される。生田秀はアサヒビール吹田本社設立の際の閑雪の一大パトロンであったことは拙著『続狂言史の基礎的研究』（二〇一五年・関西大学出版部）などで触れたが、閑雪もその恩義に報いて追福謡曲会を開いていたのである。きちんと追福を行なっていたことは、これで初めて知ることが出来た。ついでながら、明治四十四年一月号の［台湾の謡曲界］で「台湾製糖会社の技師長たり重役たる日比工学士は元朝日ビール会社の技師たりし頃大西閑雪翁から親しく教授を受けたので仕舞もやれば謡も中々堪能なものだ」とあるのも見出した。

秀の子息耕一については明治四十一年十一月号の［素人謡曲家十傑投票記事］に「投票得点九位、二百七十票」とある。確かに明治四十二年二月号では三月七日（大阪）難波明月楼で行われた大西閑雪翁古稀祝賀素謡大会に於て、耕一は〈桧垣〉を謡うほどの力量があった。

七　閑雪・亮太郎所蔵の書籍

目下、大西智久氏の御厚意で大西家蔵書解題目録を鋭意作成中である。それに関わるものとして、閑雪は自ら蔵書の一部を紹介している。亮太郎と併せて記載を試みてみる。

閑雪紹介

＊［申楽一座習道の次第］大西閑雪・予（閑雪）の家に秘蔵する元章写本を紹介。本文を掲げ、「再註」を加える。内容は世阿弥の『習道書』。（明治三十九年九月～十一月号）

＊［徒歌起源］秦曲正名閟言・初公開し注を加える（明治四十年一月号）

＊［謡曲段々壊］序文に「鶴亀元年望月日　雲林院竹雪正尊誌改正段々懐　巻ノ上　烏有居士　朱翁」・〈高砂〉の改正文（明治四十年六月号・明治四十一年二～三月号・五～八月号）

＊［謡題録（四）］〈現在七面〉〈東心坊〉〈鷺〉〈伏木曽我〉〈千年寺〉（明治四十一年六月号）

＊［雑事　謡本の起源］大西閑雪：父の寸松から伝へ聞き・元和卯月本・元章明和改正本（明治四十年十一月号）

＊「大阪住御能役者定書・安政三年六月の定書」能名代　古春左衛門・名代と年番順申年に大西寸松（閑雪翁の父）（明治四十四年三月号）

＊［雑事］古番組：神田松雲▲安政年間の勧進能・安政六年、大阪での最後の勧進能・大西新造とあるのが今の大西閑雪翁（明治四十二年十一月号）

＊［催しもの］▲松諷社月並手向謡会（大阪）十四日曽根崎松諷社・月並兼閑雪翁母堂追討謡会・〈発声〉大西新三郎・〈追加〉大西閑雪（明治四十二年六月号）

亮太郎紹介

＊［喜多古能『仮面譜』］寛政九年丁巳夏六月（以下、翻刻）（明治四十年四・六月号）

一仙楼岳主人▲斯道の神聖▲古人の逸事・喜多七大夫と大蔵虎明の舞比べ・童子草引用・長命清左衛門

＊［謡曲　女沙汰］大西亮太郎氏の取出せるもの（明治四十四年一月号）

＊［写真］翁（赤鶴作・紀州小畠久蔵）及盤若（辰右衛門作・観世家旧蔵）。阿魔佐久呂（是閑作）（明治四十三年一月号）

＊［謡口伝名目］大西亮太郎（明治四十一年一月号）

＊「唐織及厚板」（明治四十二年八月号）

八　岩井派謡

梅若萬三郎が「東京の謡と京阪の謡：大阪には大西さんが居られるので結構ですが随分他へ参りますと地吟にひどい目に合はされますからね（中略）京都大阪は岩井派の御盛んな處でございますから自然勝手が違ひましてね、いつも観世さん（宗家清廉氏）

に伺ひますと向ふ（大阪の方）へ行くと矢張りどうも向ふの様な諷ひ方をしないと地卜合はぬから東京で諷ふのとは幾分替へて諷ふ」（明治四十二年十一月号）と手厳しい。大西閑雪の謡は幸いレコードに残されているが、岩井派の流れを汲む謡がどのようなものであったかを閑雪自ら『國諷』の随所で書き残してくれている。ここでは、その代表的な記述を紹介しておきたい。

明治四十二年一月号の「名人の心懸」で次のように語っている。明和の頃、京都の師家岩井家四代の忠助師と園・林・井上の中、三氏で江戸の観世師家へ行かれた。半月目にようやく到着した途端、十五世普観院（左近元章）からすぐ舞台で独吟を謡えと言われ、忠助が〈野宮〉のクセを謡い、殊の外喜ばれ「古今無二路　達者共同道」の書を下されたと話している。書は残念ながら維新の時、焼失してしまった。五代の岩井勵助は下手だといわれていたが、五十歳の時、洛東竹内で〈島廻り〉を独吟した時、周囲は彼の名人ぶりに驚嘆した。閑雪の父虚雪は十五歳の時から岩井家の看坊役を勤めていたが、〈島廻り〉のクリ「比良の湊の川音」の箇所で七十歳になった勵助の腹力ある謡に三部屋離れたところで臥していた虚雪の耳にまで達し驚嘆したという逸話を紹介している。

[謡曲十段音法]大西閑雪・岩井派・裏の部・（一）甲繰（カンノクリ）私の名・他家では乱曲クリ又は二段クリ・以下、曲の例を引く（省略）（三）棟（ヒゾリ）私の名・テラスとも云（五）浮（ウキ）（七）下浮（シタウキ・クライヲトシ）（九）中呂・スエル所の音◎表の部・（二）繰（クリ）（四）上（アゲ・ハル）（六）中（八）下（サゲル）（十）呂・極くひくき音（明治四十年二月号）

[徒歌説（スウタヒ）]大西閑雪（長文）徒謡は京師より起れるにより今に於て京師は徒謡盛んなり東京には徒謡は無かりしなり然るに維新後は京阪古有の徒謡風大に乱れ会雖も只文章を素読する而已の様にて熟練暗誦することなく斯くては何くんぞ謡曲の妙処を謡ひ得んや　予慷慨に耐えず爰に於て研究会を起す所以也（病中執筆・明治四十一年一月号）

九　閑雪から亮太郎へ

明治四十二年に閑雪の古稀記念催しが行われた。すなわち、三月九日に博物場能楽堂で大西亮太郎〈道成寺〉・大西閑雪〈安宅〉・大西新三郎〈鞍馬天狗〉。五月六日には難波明月楼で大西閑雪翁古稀祝賀素謡大会と銘打って大西閑雪〈蟻通〉・大西亮太郎〈祝言〉、七日には引き続き生田耕一も〈桧垣〉を謡っている（明治四十二年五月号）。

しかし、その後、体調は思わしくなくなり、明治四十二年十月号に國諷会三周年記念大会の時、家族の心配する様子が細かく述べられている。

鴻山文庫がお持ちの『國諷』は大正五年六月号までなので、そ

の後のことは未調査のものが多い。倉田喜弘氏『大正の能楽』（平成十年・日本芸術文化振興会）で拾ってみても一挙に大正五年十二月十六日付の『大阪朝日』の「大西閑雪死亡」に飛ぶ。『國諷』がいつ終刊を迎えたのかも不明である。

　閑雪のあとを継いだ亮太郎も意欲的であった。『國諷』明治四十一年一月号に［廣告］を出し、「能楽拍子方養成の為満拾二歳より拾五歳迄之男子生徒六名集募す満三年にて卒業成年より就業自営之目的を達せしむ、無月謝にて取立致し候に付来る四月一日迄に当人履歴書相携へ親権者附添同道申込まれ度候詳細は御面談可致候事　大阪南区塩町三丁目　松諷社　大西亮太郎」と呼び掛けている。囃子方不足を憂えて、現在の能楽養成会のようなことを月謝なしで行なうとの広告を出している。

　大正五年四月号の［報道］に「大西（亮太郎）氏の大阪に於ける能楽堂建設」とあるのは天王寺区に住友家の援助を受けて同八年に完成し、当時日本一といわれた大阪能楽殿のことである。大西信久『初舞台七十年』（昭和五十四年・大西松諷社）によれば「一生のうちに十三箇所に舞台を作ったといわれている」。

十　勅題小謡

　毎年正月に発表される勅題小謡は能楽師にとって名誉なことでもあろう。冒頭文を引く。

　閑雪作

［御題『新年松』小謡］「治まれる代に相生の」（明治四十年一月号）

［勅題小謡］「幾代経ぬらん住の江の」（明治四十一年一月号）

御題『雪中松』「君か代の久しかるべきためしには」（明治四十二年一月号）

［勅題新年扇］大西閑雪先生筆新作謡曲　大阪市吉井照影堂（明治四十二年十一月号）

［勅題小謡］新年雪：蓑田高木半作・大西閑雪聲譜（明治四十三年一月号）

　亮太郎作

「天照す。日の本なれや久かたの」（明治四十一年一月号）

［勅題　雪中松］「千年ふる。松の梢の六の花」（明治四十二年一月号）

［勅題小謡　寒月照梅花］公雪　照り渡る月の光りにうつむ哉（明治四十四年一月）

十一　興味ある記述

吹田・堺での謡会

以下、筆者の興味を抱いた記述を引用。

明治四十一年七月十二日（堺）天神社内聚楽館清韻社夏季謡会・〈頼政〉大西壽俊（明治四十一年八月号）

明治四十一年四月廿三日（堺）菅原社内聚楽館・故小沢好三翁追

討素謡会（同五月号）
＊いわゆる堺天神で鶴崎裕雄氏を宗匠に連歌を巻いたことがある。

明治四十一年九月廿三日（吹田）光明寺三島郡連合素謡会（明治四十一年十月号）

明治四十三年四月十日（吹田）好友会謡曲例会・観音寺（明治四十三年四月号）

明治四十三年十一月十五日（吹田）旭神社奉納謡曲囃子会（吹田）ビール会社々宅千里荘・高木半〈景清〉（明治四十三年十一月号）＊地元吹田でも種々行われていた。

玉手菊洲

[謡曲師範家及会員の避難所] 大阪市に於ける未曽有の大火のため（明治四十二年七月）

[紹介欄] 紛失物の広告・大火の折、銀屏風・土佐光重筆三十六歌仙絵（明治四十二年十月号）

高木半

皇太子殿下に新能楽本を献上す　大阪府三島郡福井村住の高木半（文政十年六月生）の映えある行為を詳述。略歴をも記す。（明治四十五年一月号）

[報道] 高木蓑田翁の彰徳碑建つ・大阪府三島郡福井村の名門蓑田高木半翁の彰徳碑同村新屋神社鳥居の傍に建てられ、去月二十四日午前九時より除幕式を挙行されて、新屋社前に於て発典執行能楽囃子の演奏あり。その番組は〈猩々〉大西新三郎・〈高砂〉大西亮太郎の二番終りて、又、午前十一（時）より高木氏宅に於て始祖高木俊政大神三百五十年祭を執行。能楽囃子の演奏あり。以下、高木半自ら〈景清〉を謡っている。実に本年八十五歳という。

又、大正二年十月号の[報道]にも「高木蓑田翁の彰徳碑建つ」としてほぼ同文が記載されている。これにかかわって中尾薫氏が「明治の近代化と高木半」（『待兼山論叢』第47号・美学篇・大阪大学大学院文学研究科）に詳しく紹介されている。元は「西野春雄氏が、関屋俊彦氏から示された資料として『福井村沿革誌』」云々とあるものだが、昭和五十八年度に国内研修で法政大学能楽研究所を受入校としていただいた折、思い切って東京に引っ越した。その記念の意味も含めて「関西大学図書館所蔵「杭全家狂言伝書」」を豊文社印刷所から出したことがある。その時、お渡ししたお一人西野氏から高木半のことを聞かれたので『福井村沿革誌』を紹介した次第である。レジュメみたいなものであるが、どうしても出版なるものをしてみたかった若気の至りで汗顔ものである。

訴訟事

[謡曲本文改訂に就て] 檜本と丸岡本の版権訴訟について。丸岡某（桂）は「観世家の家宝を盗む兇賊」とする。のちに丸岡勝訴となる。（明治四十一年三月号）

［能謡展望遠鏡］和泉流の不和調停・山脇元清と高島弥五郎氏の分離を久保扶桑・久米民之輔が調停。（明治四十一年三月号）
［生一左兵衛翁地下に泣かん］小西米太郎氏（前名生一庸）が一旦、観世宗家から破門された事件。『能楽大事典』では「生一綾雪」で立項。（明治四十一年十月号）
［重習の直し入出版に就て］愚昧なる観世喜之氏遂に破門となる・無断出版（明治四十四年三月号）

おわりに

当時の能楽に対する考えとしては第五号（明治三十九年十二月）に「大西亮太郎氏は何故他の余興屋（注：歌舞伎）と共に余興をする事を承諾したゞらうか」とか「能舞台には平生婦女をして上らせぬ事にしてある」のに亮太郎氏が「主人側に交渉し舞台はすつかり削らし」たのに記者が感心しているのは時代を感じさせる。

『國諷』が創刊された明治三十九年という年は南満州鉄道株式会社が設立された年である。『國諷』の名実共に発行権者となる泉秋花は明治四十一年三月号で「満州だより」を執筆したことを初めとして満州を訪れること多く、発行にすら影響するほどであった。行く先々の能楽師に取材する記者魂は当時の記録としてそれはそれで貴重な記録となっているが、能楽に無理に結びつけようとする記述は国の意向に振り回されているともいえる。第二次大戦に突入する直前に発行された新聞・専門雑誌は、気を付けながら取捨選択して読まなければなるまい。それでも愚直に生の資料・声を拾っている専門誌の存在は大きい。「能とは何か」とは常に問われてきたことであるが、時代の変化の波に翻弄されても生き残ったところに価値があるともいえる。

『國諷』は東京の『能楽』に対抗するように大阪を本拠として発足した。『能楽』はやはり需要の多い東京の演者を中心にする記事で満たされていた。地方のことにまでは目が及ばない。『能楽大事典』も重宝しているが、どうも東京中心の編集になっている。当時は、まだ東京から大阪まで時間を要する「旅」であった。観世宗家が来阪するだけで記事にした。能楽の需要もあり、能楽師が大勢いる。編集者が泉秋花一人になって、彼は経済的にも行き詰まり、東京へと進出していった。情報はそれだけ潤沢になってきたが、果たしてそれでよかったのか。神社仏閣の多い関西ましてや戦災の被害の少なかった観世屋敷や御所を擁している京都にはまだまだ資料が埋もれているのではないだろうか。勿論、もっと広げて地方にも目を行き届けたい。

『國諷』をほかにもお持ちの方がいらっしゃらないか御教示願いたい。出来れば『能楽』と同様、『國諷』もバックナンバーが揃った時点で復刻されたらと願うものである。

実は六麓会で泉秋花の御子孫の方が健在であることをお聞きしている。是非、お会いしたい。

【付記】本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）「大阪能楽会館蔵書解題目録の作成ならびに茂山千五郎家と青家のかかわり」（課題番号18999955 研究代表者　関屋俊彦）に基づく研究成果の一部である。

The Rise and Fall of the Noh Actor Ohnishi Family
――Focusing on “Kokuf û”――

SEKIYA Toshihiko

I was able to obtain the whole book entitled “Kokuf û” with pictures. “Kokuf û” is held by the Noh Theatre Research Institute of Hosei University. The first comprehensive Noh magazine was “Nohgaku” (1902). There is also a reprint of “Nohgaku,” which is often used by researchers. The existence of “Kokuf û” was known but now it is difficult to obtain. I expected that the activities of Ohnishi Kansetsu (1840-1916) and his nephew, Ryoutarou were written in “Kokuf û,” the only one issued in Osaka. I went to Hosei University several times to read it, but the quality of the paper was extremely poor, so I needed special permission. The most successful result is “About the beginning of the chants of Kyoto Kanze Yashiki described in “Kokuf û.” Eyewitness accounts that Zeami received a spear from Shogun Yoshimitsu and a notice of Tadasu Rever Kanjin in Noh (1461) was on a half tatami mat. These may be new to researchers. In “Kansetsu and Sekidera Komachi” was third performance (1909.4.3). While Kansetsu was dancing, his costume became untied, which is a rare occurrence for Master Kansetsu. There are real voices of the performers who participated in Noh programs in the Kinri. Kansetsu’s, specifically, is invaluable. The reality of Osaka Museum Noh Theatre is well -written. Books held Ohnishi family matches the current issue is something.

キーワード：新右衛門（Shinemon）、閑雪（Kansetsu）、手塚亮太郎（Ryoutarou Tezuka）、岩井家（Iwai Family）、観世家（Kanze Family）